

新潟県

公民館月報



旗

きのうもきょうも
 そしていまも
 ますたたかがある
 あの陸にもそしてこの海にも

旗はたたかいのしるし
 人と人の
 船と船の競争のしるし
 風のある晴れた日の海の旗
 勇ましく潮風を切る旗さお

大砲もミサイルも撃てない船の
 軍艦旗
 旗に向かって勝つことを知らない
 魚たちの
 ひからびたにおいを乗せて
 船と船の
 海と人の鮮烈な祭典

(写真は出雲崎の船祭り・本紙)

昭和50年5月号

発行所 新潟県公民館連合会
 【新潟市一番畑通町・県教育庁社会教育課分室内】
 【電話・(新潟)28)61111内線326】 【振替新潟
 4094】

発行人 会長 石井耕一
 編集人 事務局長 本田 清

【定価：部50円・年600円】

実践記録シリーズ

②

この「実践記録シリーズ」は、各公民館のコミュニケーションを深めるため現場での実務の体験例、その成果、反省点などを集約し、本紙の年間特集としているものです。質疑・照会等は当該公民館に問い合わせるなどお互いの活動を盛り上げるために大いに活用ください。(編集部)

熱心な九十三歳

わが町の長寿大学

生涯教育の一環として老人教育三年を繰りましたが、どうか軌道が大きく取上げられ、各地で成果に集ってきただけがたいです。をあげておられるのは御同様に、その機構(学則より)なえません。わが町でも開校以来、六十歳以上の町民で希望者は



小須戸町

【長寿大学の話しあい集会】

誰でも入学できる。現在男九四、女七三、計一六七

2、役員

・学長 公民館長

・主事 社会教育指導員(主任)

・社会教育主事、公民館主事

・幹事 学生中より若干名

・主事と共に企画の原案作成

・校長 学生中より一名選出

・運営委員 各単位老人クラブより一名ずつ、各クラブの部長、町民生活課長、公民館副

・部長。現在一〇名

企画の原案を検討決定の上実際運営に当る。

2、学習形態と内容

1、全体学習

年度当初に全学生にアンケートを求め、年間計画を組む。

・本年度の計画

四月 入学式 第一回学習

町政の重点 五十嵐町長殿



石井耕一 本会々長
はさる四月二十七日
行なわれた統一地方選
挙において農業市長に
再選されたあと、本田事務局長
に託し貧困財政の県公連連管の
一助に金三万円を寄附され
た。このため四月三十日開かれ
た本会総会では、この石井会
長が、このたびの選挙戦でも、
長(郷志)を生かし五十年度予算
に十分に反映するよう期する
ことを志す。

本会に寄附金三十万

石井会長・運営費の一助にと

石井会長は自ら、自筆の
とも宛派を起して広げしてくれ
た。無駄な出費をほろぎ、公明正
義な選挙戦を展開した結果、法
定選挙費用を大巾に下回ること
ができた。

五月

老人と健康 富山ヒトミ殿

六月

老人の役割と生きがい 吉里勝栄殿

九月 (全日学習員長会) 吉水トシ殿

レクリエーションと体育 吉水トシ殿

十月 (天代田小学校参観) 相馬小学校長殿

学校教育の諸問題

十一月

体験発表会 助言者未定

一月

現代生活と信仰 坂内種雄殿

(講師はいずれも予定未定)

2、クラブ学習

クラブ員の自主的運営による学

習を進める。連任講師を委嘱

前年度(四九年)の実績

書道 部員一九名 八二時間

家庭 部員三六 六九〇分

園芸 部員三五 三〇〇分

民謡 部員一六 七四〇分

囲碁 部員九 六一〇分

ハイキング 部員三八 二二〇分

3、特別学習

特別希望者による学習で出欠を

とらへた。

・本年度の計画

六月 町議会傍聴

七月 社会見学 東浦原めぐり

九月 他町村老人大学との交歓

十月 村松町の予定

十月 町民運動会参加

きのこ祭り

ができた。

従来から、この種の選挙の債

例として支持者が陳中見と称

し、清酒を持参することが行な

われていたが、このたびの選挙

では、多くの応募者が、清酒代

に見合う金一封を陳中見

舞として選挙事務所まで

届ける者があつてきた。

これは公職選挙法の健

全な適用と明るく正しい選挙の

あり方として今後大いに普及

させたい事柄の一つである。」

(写真は講演中の石井会長)

いう点であります。その中核は連

管委員会です。前年度は古閑さま

したが、殆んど全出席で活発な議

論等も行なわれ、非常に感服的

であります。次にクラブ学習が活

に満ちていることです。その口が

楽しみです。待ちたいという学生の

声がよく聞かれます。

最後に学生の現在最高年齢は九

十三歳で、八十歳以上が八名お

り、いずれも町民長であること

を申しあげて結びたいします。

生くることよろしくたし

老の春

風生 (波倉前御用)

【間野良知・小須戸町公民

館長発】

高齢者学級参加記

人生がある。青年には青年、壮い姿で少しも恥かしいことではない。したがって悲観する必要もない。しかし老人の人生がある。また老人には老人の人生があることはもちろん当然である。老人だつて過去を捨ててなぐさみん未来があるからだ。それは明日への希望をもつて生き甲斐を求めておることである。

生き甲斐は歩いてこない

和島村 羽鳥一義

しかしほんとうの生き甲斐なんかない。生きていけるものは必ず老いる。死と誇りの所持者であるか、今一年三月まで受講、この二万年間各々が開拓しなければならぬと思度とない人生だから自身が健康に。老いると言ふことは長い年月 留意 長生きしてより明るくより。この時ばかりは羽鳥が和島村に。この時はからずもわが和島村にクリエーションをかためて見聞見学の機会を得て心の糧を収穫出来得る。時が自然に運んでくれた尊厳を奪ふべきではないだろうか。その理解と老々会長および同連帯委員一たことおびの極みで深く感謝の意を表す次第である。

灯台

青少年教育の点と線

柏川正之

社会教育を遂行してからもう二三年になった。社会教育の速さにはとまどひて行けない。そのため、あるものはすなわち、次の点を挙げてみた。

社会教育関係者は、『未婚青少年が多い』と嘆いているが、福祉関係の施設や農業関係の施設等で、集団活動は意外と

り、施設を。 青少年教育の点と線 活動の進め方については、以前から議論を呼んでいるところであるが、社会教育関係者は、学校教育と社会教育の結びつきが、このように出され

現在市町村の体制では、全面的に「連携」をすることは不可能であるが、今後この問題は、避けて通ることの出来ない問題であると思われる。

そこで、単なる事業として実験的にモデル地区を定めて実施できないものだろうか。異業による専任指導者と有志指導者とによって、指導組織を作り、学校施設を中心として活動を展開してみたら、案外な成果を生むかもしれない。

(津川高校教頭・前県社教主事)

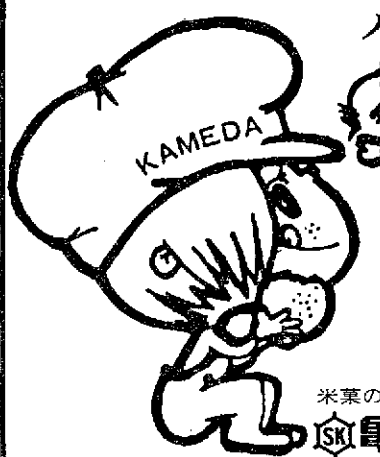


理想にしたグループが、継続的、計画的な活動を活動にたなごころをさえる。まこれらに集団活動を支えているた、商工会関係でも、若い自費者たちの集まりが、この町で

活動の進め方については、以前から議論を呼んでいるところであるが、社会教育関係者は、学校教育と社会教育の結びつきが、このように出され

(津川高校教頭・前県社教主事)

バラエティに富んだ品ぞろえ



電田のあられ

おせんべい

米菓の総合メーカー

ISKI 電田製菓株式会社

本社：工場/新潟県電田町元町1の3の5 TEL(0253)82-2111(4)
支店：富山所/東京・大阪・名古屋・札幌・福岡・仙台・静岡・長野・金沢・広島・鹿児島

小千谷市



【キャンプファイヤーをかこんで小千谷市の青年たち】

小千谷市は人口四万四千、いわゆる田園都市に属しているが、いまや上越新幹線や関越高速道路等の建設によって大きく変ろうとしている。

このような地にある青年たちは、いったいどのような余暇活動を行なっているのだろうか。

小千谷市公民館では、さきに「青年の余暇利用状況アンケート」を行ない、その実態を明らかにした。アンケートは十五歳から十九歳までについて詳しく行なったが、内容はおおむね同傾向であったので本紙では、十九歳の例のみ掲載することにする。

「アンケート」結果を述べる前に、まず市内の青年たちが日頃どのような活動の場があるかを述べてみたい。

各地域には、小学校区単位に公民館分館が設置されており、青年・婦人・成人・老人に至るまで分館を活動の拠点としている。地域青年会、四耳クラブ等の団体も

仲間意識が成果生む

「青年の余暇活動の実態」を見て

小千谷市公民館主事 波 辺 長 栄

この分館を利用している。しかし、青年の諸活動の特長は、何んと言っても、スポーツ、レクリエーション活動中心であり、この点からいうと施設面では恵まれているとはいえない。それ山村地域では、学校施設を利用し、全村を対象にしての「部落連動会」「文化祭」等を行なったりして、青年たちが活動の中心の役割を果たしていることには、多少の

この結果、
一位 テレビ、ラジオの視聴
二位 友人との雑談
三位 新聞、雑誌
となっている。調査期日毎に調査集計した結果でないで「余暇活動」の傾向調査に止まったが、ほは私たちが予想していたとおりであった。

次の、週休二日制(隔週二日制)の実施状況は、従来員数二〇名以上の事業所を抽出して行なうたためか実施率は高くなっていた。

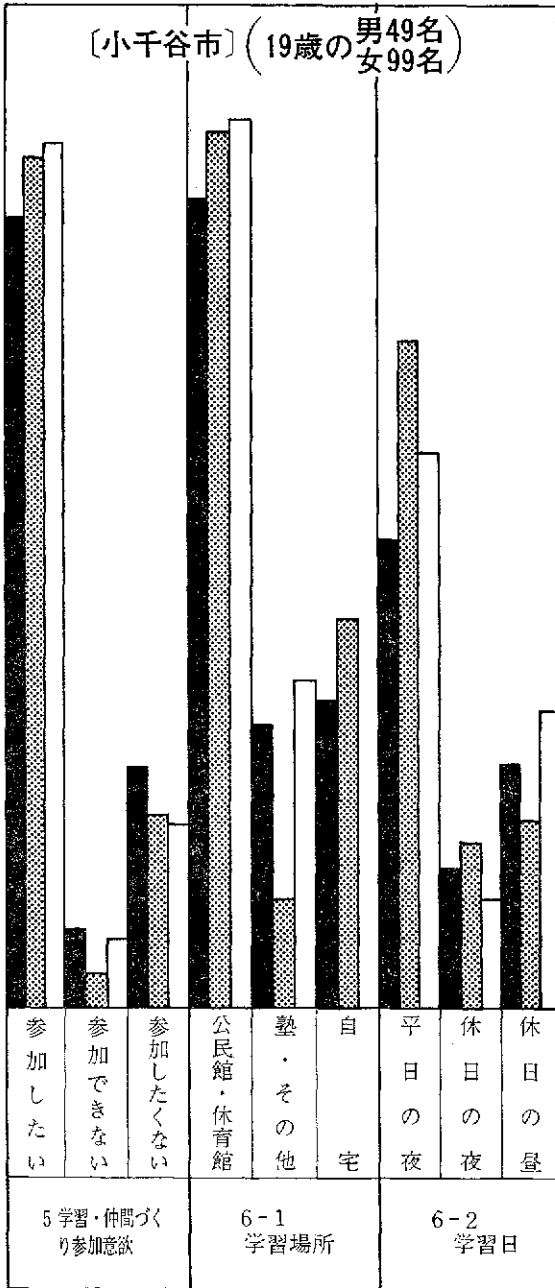
実施されている 四二・四％
実施されていない 五六・六％
この実施されていない青年は、この実施されていない青年は、

一位 旅行、ドライブ
二位 スポーツ
三位 読書、趣味、買物、家事
となっている。しかし、実施されているところでは、平日とほとんど変わりないと考えていた。以上がその実態である。それでは、余暇活動はというと、

一、将来自分のためになる余暇活動を行ないたいと考えている青年が五四・七％と半数以上いる。

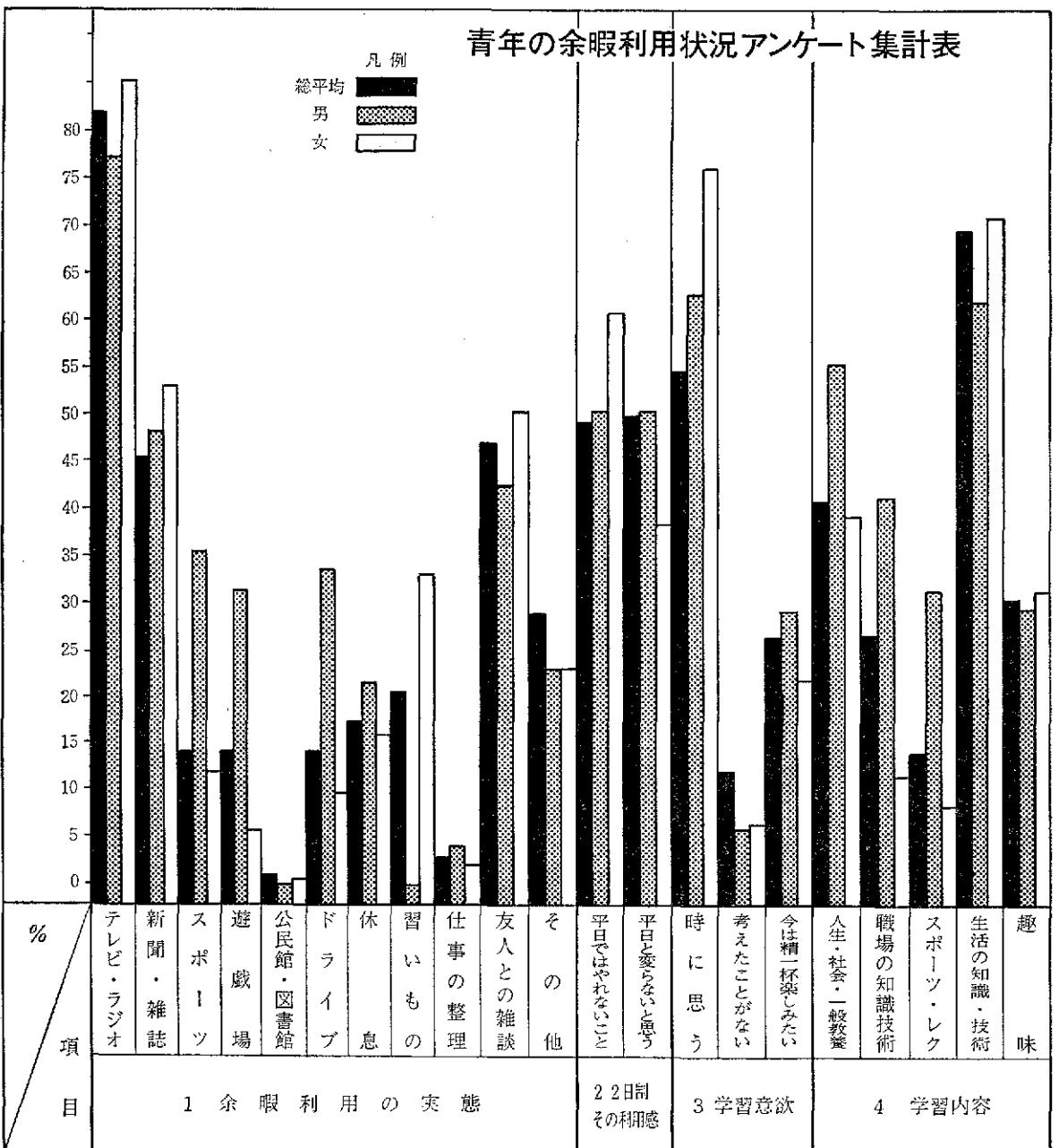
調査期間 十一月二十日～二十二日
調査対象 月千日
事業所数 五〇
対象者数 五四五名
回収数 三二一名
回収率 五七・一％

〔小千谷市〕 (19歳の男49名 女99名)



| | | |
|----------------|----------|---------|
| 5 学習・仲間づくり参加意欲 | 6-1 学習場所 | 6-2 学習日 |
|----------------|----------|---------|

青年の余暇利用状況アンケート集計表



1 余暇利用の実態
 2 2日間の利用感
 3 学習意欲
 4 学習内容

以上「余暇活動の実態」と「余暇観」の調査結果に基づき、職場青年と懇談会を開催し青年たちの声を聞いた。それによると、

・青年はより幅広く活動をもりたい
 ・よも多くの仲間を得たい
 ・皆んなと一緒に何かをやりたい
 ・専らには、心理的に誰れもが持っているものがある。しかし団体、グループ活動で年齢の差を感じることも、年間編制的に行なうものに対しては、実際、参加どうし段階にならなかなりの勇気がいる。彼等には、他にももっと何かやりたいことが多い。その点、スポーツ、レク活動や趣味活動は、年齢を越え行なうことが可能であり参加しやすい。また趣味を同じくするものなら年齢差も継続性も

高む。

それでは、青年学校や地域青年団体、趣味団体への参加意識を高めるにはどのようなすればよいか。最近では、チラシやポスター類の会員募集は、余り有効なものでなくなつたようである。また、大切なことは、青年自身がお互いに誘ひ合うことである。それと、募集する例から広げ地域に賛同者が必要であり、その基本になることは「互いの仲間意識」である。

心の中は、只ひこととは理解できても「参加」といふことにならぬと意識が聞けない。仲間意識は、この心の扉を開いてくれさうである。友だちから電話がかかる。「今日は、レクリエーションの集いがある日だ」「面白そうだ、行って見ようか」そんなときは、テレビが面白い、雨が降って来ても大丈夫でも飛び出してしまふのである。

昭和五十年度の当市における「青年学校」の開設は、以上の「調査」「話しあい」活動を踏まえ、歩み始めたばかりである。

